

大学初動教育としての帰属感情高揚プログラムの開発

心理学部 臨床心理学科 奥田 亮
 発達教育心理学科 川上 正浩
 臨床心理学科 坂田 浩之
 ビジネス心理学科 佐久田 祐子

【問題と目的】 「大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である」との認識から、我々は数多くの大学で初動教育の一環として行われている新入生オリエンテーション（あるいは新入生研修会やフレッシュマン・キャンプなどとも呼ばれており、本学では学外オリエンテーションと称されている。以下では、これらを総称し略してFOP [Fresher Orientation Program] と呼ぶことにする）を取り上げ、その特徴や効果等について過去6年間にわたり継続的に調査研究・発表をおこなってきた。

我々の一連の研究において、集積されたデータから得られた結果の一つが、「FOPにおいて学科への帰属感情が高揚することで、その後の大学生活の充実感が高まる傾向が見られる」というものであった。この結果に着目し、我々は2008年度本学特別研究助成を受けて「学生の大学・学科に対する帰属感情を高めるプログラム」をFOP外で初動教育に関わる別の企画として、試行的に実施した。プログラムの内容は、上回生や卒業生が大学生活を振り返って学科や大学生活について様々な観点からコメントする映像、およびゼミでの学びの風景の映像を学生に呈示しつつ、教員3名が対話を展開するというものである。こうしたプログラムにおいては、帰属感情を高めるために1回生に呈示される様々な刺激（上回生・卒業生やゼミ風景の映像など）をより適切に作成あるいは選定する必要がある。

本研究では、2008年度に着手された「学生の帰属感情を高めるプログラム」をより改良して開発を進め、1回生を対象にその効果を測定することを目的とする。そのために、昨年度試行的に作成した在校生へのインタビュー（心理学を専攻した理由と大学生活の所感等）の刺激映像に加え、今回作成した卒業生が職場で活躍する風景を中心とした映像刺激とが、1回生に与える影響について統計的に比較することを目的とした。

【方法】 帰属感情高揚プログラムのための映像刺激（卒業生インタビューのVTR）の素材を平成21年7～10月にかけて収集し、映像の編集をした後、同年12月に心理学部1

回生を対象にプログラムを実施して効果測定を行なった。プログラムでは、進行役を複数名の教員が担当し、主に上回生や卒業生の活動や声をVTRの形で呈示した後、教員からの「私の心理学の学び」の呈示と教員同士の対談を行なった。VTRは、プログラムAとして在学中の上回生からのコメントを中心としたものと、プログラムBとして卒業生の職場での活躍風景を中心としたものの2種類を用意した。これらはいずれも、心理学を学ぶこと、あるいは大学生活を経ることによって個人にどのような変化が見られるのかを映像で呈示し、大学生活との関連の上で自己の将来像を描かせること、そして自らがその学部所属することの意義を認識することによって帰属感情が高まることを意図して作られている。特にプログラムBでは社会で活躍する卒業生の姿を映像として呈示することで、誇りを高めることも併せて意図している。

本プログラムは心理学系の授業の一環として実施された。調査対象者は学籍番号によって2グループに分割され、隔週に当該授業を受講している。一方のグループにはプログラムAを、他方にはプログラムBを実施した。11月の授業内で大学生活充実度尺度（S1）および帰属感情尺度（B1）を実施し、12月の授業内でプログラムを実施した。プログラム中、VTR刺激の呈示が終わった段階で、大学生活充実度尺度（S2）および帰属感情尺度（B2）を実施した。

【結果と考察】 プログラムの前後で大学生活充実度および帰属感情尺度に変化が見られるかどうか、調査時期（2）×プログラム（2）の2要因混合計画の分散分析を各下位尺度得点を従属変数として実施した。その結果、少なくともプログラムAは大学へのフィット感を高める効果を持つことが示された。すなわち、上回生が心理学を学んで、どのように自身が変化したと感じているのかを呈示することには効果があると考えられる。一方で、いずれのプログラムも大学生活に対する不安を高めるものであることも示された。これは、「立派な先輩」の姿を意識することにより、むしろ自信を喪失することによるものではないかと解釈された。